2023年3月19日　中野教会日曜礼拝

**「哀歌：絶望、希望、絶望」**

聖書箇所：哀歌2:9-12、4:20-22

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　哀歌という文書はキリスト教の聖書ではエレミヤ書のあとに置かれていますが、ユダヤ教の聖書では諸書の一つとして、聖書の最後の方にある文書です。BC2cに旧約聖書がギリシャ語に翻訳された時、前書きがつけられました。「イスラエルの捕囚と、エルサレムの崩壊後、エレミヤは泣きながら座し、エルサレムについて哀歌を歌った」というものです。この時、ギリシャ語聖書（七十人訳）では、哀歌はエレミヤ書のすぐ後に置かれました。その後キリスト教の旧約聖書ではこの位置に置かれ、悲劇の預言者エレミヤが詠んだ詩とされてきました。実際にはいつ書かれたのかはわかりませんが、ユダ王国滅亡の後、カナンの地で詠まれたものであろう、と推測されています。ユダヤ教の伝承でも、捕囚後間もない頃、エレミヤによって詠まれたとされています。

　ユダヤ教の暦の5月9日、太陽暦では7月に、ティシャ・ベアブという日があります。ヘブル語で5月9日の意味です。この日にユダ王国が新バビロニアによって滅ぼされた、とされています。エルサレム神殿崩壊の日です。BC586年のことです。そしてユダ王国の枢要な人々はバビロンに捕囚の身となったのです。いわば、敗戦記念日です。この日は国を失った民イスラエルが、その運命を嘆き悲しむ断食の日です。2500年以上の間、世界中のユダヤ人によって守られ、現在も続いています。嘆きの壁、というのが今もあります。これはソロモン神殿の一部がエルサレムの度重なる破壊にも耐えて残った部分と言われており、この日にはこの壁の前で礼拝が持たれます。

　哀歌の最初は「e:ka:」という感嘆詞で始まります。このため、ヘブル語の聖書では哀歌のことを「e:ka:」と呼んでいます。哀歌はアルファベット・アクロスティークと言い、各節がアルファベット順に並んでいます。いろは歌と似た技巧です。「e:ka:」はヘブル語アルファベット「a:lef」で始まります。その他、韻を踏んでいたり、囲いこみ構造になっていりで、かなり凝った詩になっています。しかし、中身を見ていくと、日本語の言葉で「哀しい詩」というような言葉で済む内容ではなく、残酷、残虐、悲惨、失望、破壊、滅亡、とあらゆる否定的な言葉が使われているようにさえ思います。日本語の哀愁を込めた、などというものではなく、極めて暴力的な残酷劇が展開されます。しかし、その中でも、希望が見られます。主なる神がなんとかしてくれるはずだ、という希望です。しかし、その希望は無残な失望に終わります。つまるところ、希望はないのです。哀歌の最後も「あなたは激しく憤り／わたしたちをまったく見捨てられました。」という言葉で終わります。主なる神は、イスラエルの民に激しく憤り、私たちを全く見捨てられた、ということで終わるのです。

　全体は5章であり、一言で、1章は「哀歌」、2章は「絶望」、3章は「希望」、4章は再び「絶望」、5章は「期待」と名付けられています。今日は、この「絶望」と名付けられた2章と4章を見てみます。ポイントはいくら絶望といっても、どこかに希望の片鱗はあるはずだ、そうでなければ、人間は耐えられないはずだ、と思いながら見ていくのです。詩編にも多数の嘆きの詩というのがありますが、最後は主なる神への希望と賛美で終わるのが大部分です。嘆きから希望に代わるにはかなりの時間を要し、間奏曲の時がしばらくあるのかもしれません。しかし、哀歌の「絶望」の章節では希望を見出すのが困難です。この哀歌は先ほどのティシャ・ベアブの日に、必ず読む詩になっていますが、このような夢も希望もない結末の詩をよくまあ、長い間、ユダヤ人は歌い続けてきたなー、と驚きを禁じ得ない、ところです。日本も、アジア・太平洋戦争敗戦後は、8月15日を敗戦の日として悔い改めと新しい希望を見る日としていましたが、早い時期から、それはなくなって、戦死者の追悼日のようになってしまいました。両民族の歴史的背景の差を感じます。

　では2章から見てみます。2:1-8は「敵としての主」という挑戦的な名前が付けられています。2:1-2「なにゆえ、主は憤り／おとめシオンを卑しめられるのか。イスラエルの輝きを天から地になげうち／主の足台と呼ばれたところを／怒りの日に、見放された。/ヤコブの人里をすべて、主は容赦せず圧倒し／憤って、おとめユダの砦をことごとく破壊し／この国を治める者、君侯らを／地に打ち倒して辱められた。」とあります。エルサレムが新バビロニアによって破壊された時の状況を描写しています。新バビロニアによる破壊を主なる神のイスラエルに対する怒りの現れだ、としているのです。イスラエルの罪に主なる神は怒りの鉄槌を下した、というのです。新バビロニアの王ネブカドレツァルは主なる神の手足となって働いたというのです。これはエレミヤがイスラエルの民に新バビロニアと戦いをまじえるようなことはするな、と言い続けてきたことが反映しています。エレミヤは敗北主義の預言者だともいわれています。彼は、武力抵抗により多くの民が死ぬよりも、軍事的には敗北しても自らの信仰を維持する道を追求せよ、と主張したのです。

　哀歌では、主なる神は救いの神である以前に、イスラエルの罪を徹底的に糾弾する怒りの神です。ここでのイスラエルの罪とはなんでしょうか。モーセやヨシュアの時のように，異教の神を礼拝することでしょうか。いえ、そのような罪から、この時代のイスラエルの罪は主なる神の正義と公平が破壊された社会になってしまっていた、ことです。主なる神の正義と公平というのはイスラエルの支配者は主なる神のみである、人間による人間の支配を神の義に反すること、即ち罪と理解するということを意味します。イスラエルは南北の王朝が続く間に、王族・貴族・宗教者である支配階層と一般の民との格差が広がり、イスラエルという一つの信仰共同体が失われていたのが現実でした。イスラエル信仰の根本には主なる神の恵みによって生かされているイスラエル共同体という考え方があり、極めて、平等志向が強い社会です。

　2:5-6をお読みします。「主はまことに敵となられた。イスラエルを圧倒し／その城郭をすべて圧倒し、砦をすべて滅ぼし／おとめユダの呻きと嘆きをいよいよ深くされた。/シオンの祭りを滅ぼし／仮庵をも、園をも荒廃させられた。安息日をも、祭りをもシオンに忘れさせ／王をも、祭司をも／激しい怒りをもって退けられた。」とあります。「主はまことに敵となられた」と宣言しています。主なる神が選びの民イスラエルを滅ぼしてしまおう、とされている、というのです。しかし、注意すべきは、このような中にあっても主なる神への信仰を捨てて、他の神を礼拝しようという気持ちはみじんもないことです。イスラエルの民は、自分たちは主なる神あっての自分達であり、主なる神が本当に見捨てたら自分たちは存続できないことを知っており、なんとか、主なる神の怒りから逃れ、ゆるしが与えられる道はないのか、心の中で必死に探しているのです。

　そして、本日の聖書箇所の一部、2:11-12です。「わたしの目は涙にかすみ、胸は裂ける。わたしの民の娘が打ち砕かれたので／わたしのはらわたは溶けて地に流れる。幼子も乳飲み子も町の広場で衰えてゆく。/幼子は母に言う／パンはどこ、ぶどう酒はどこ、と。都の広場で傷つき、衰えて／母のふところに抱かれ、息絶えてゆく。」とあります。「わたしのはらわたは溶けて地に流れる」というところは、協会共同訳では「わがはらわたは痛み---わが肝臓は地に注がれる。」となり、神の痛み、の意味を復活させています。耐えがたい苦痛、苦難のことです。「母のふところに抱かれ、息絶えてゆく。」はどのように読むのでしょうか。ティシャ・ベアブの日には聖書を飛ばして読むことは許されませんから、礼拝の司会者はただただ、読んだことでしょう。

　3:20をご覧ください。「主よ、目を留めてよく見てください。これほど懲らしめられた者がありましょうか。女がその胎の実を／育てた子を食い物にしているのです。祭司や預言者が／主の聖所で殺されているのです。」とあります。「女がその胎の実を／育てた子を食い物にしている」と言われています。言葉だけから言いますと母親がその子を食料にしている、というのです。このようなことが起きうるのでしょうか。動物でもほとんど聞いたことがありません。しかし、限界状況のところでは起こり得ることなのかもしれません。

　2章は最後まで希望のかけらも見えません。2:22の後半部分は「主が怒りを発したこの日に／逃げのびた者も生き残った者もなく／わたしが養い育てた子らは／ことごとく敵に滅ぼされてしまいました。」とあります。全滅です。また母が養い育てた子らは、ことごとく敵に滅ぼされてしまいました、とあり、母の耐えられない悲しみ、苦しみが推測されます。ユダ王国の滅亡時にはこれほどの惨劇は起きませんでしたが、この後のユダヤ民族の歴史の中ではエルサレムの地一人のユダヤ人もいなくなった出来事もありました。おそらく、哀歌はユダヤ人の現代に至る歴史のなかで、その具体的意味が付与されてきた、と理解すべき、ものであろう、と思います。その行きつく先には、第二次大戦中の、例のホロコーストがあります。

　続いて、「絶望」と称せられているもう一つの章である第4章を見てみます。こちらは、第2章と異なり、第三者的うたわれ方がされていますので、第2章よりは落ち着いて読めそうです。しかし、4:3-4を読みます。「山犬ですら乳を与えて子を養うというのに／わが民の娘は残酷になり／荒れ野の駝鳥のようにふるまう。/乳飲み子の舌は渇いて上顎に付き／幼子はパンを求めるが、分け与える者もいない。」とあります。母と子のイメージがここでも述べられています。シオンの娘は子供に対しても残酷となり、駝鳥のようにふるまった、とあります。旧約聖書では駝鳥はジャッカルとともに無慈悲な動物の代表と考えられていたようです。乳飲子にも、幼子にも食べ物が与えられず、餓死していくさまが想像されます。残酷の一字です。しかし、今も、多くの難民の中で、このようなことが起こっていることに目をつむることはできません。

　4:7-8には「この民のナジル人らは雪よりも清く／乳よりも白く輝いていた。骨は真珠よりも輝き、姿は水晶のようであった。/だが、彼らの容姿はすすよりも黒くなり／街で彼らと気づく者もないほどになり／皮膚は骨に張り付き／枯れ木のようになった。」とあります。ナジル人というのはイスラエル信仰にすべてを捧げ、髪を切ることもしない信仰者のことで、そのような人物が現れて、輝きを放っていたというのです。カナンの地に残された祭司の中には、このような立派な信仰者もいたはずです。しかし、すぐ、みすぼらしい様相になり、枯れ木のようになってしまい、イスラエルの民を救うものになぞなりっこありませんでした。かすかな希望の芽もすぐしおれてしまい、希望が現実化することはありませrんでした。

4:10には「憐れみ深い女の手が自分の子供を煮炊きした。わたしの民の娘が打ち砕かれた日／それを自分の食糧としたのだ。」とあり、母と子供の残虐劇が行きつくところまでに行ってしまいました。4:14-15「彼らは血に汚れ／目は見えず、街をさまよう。その衣に触れることはだれにも許されない。/「去れ、汚れた者よ」と人々は叫ぶ。「去れ、去れ、何にも触れるな」と。「こうしてさまよい歩け」と国々は言う。「再びここに住むことはならない」とあります。イスラエルの民は住民から嫌われ、汚れた者として扱われ、ここに住むことは許されない、いなくなれ、と言われる民となるのです。ユダヤ人の歴史を預言しているような表現です。

　しかし、再び、かすかな希望が見えてきます。4:20です。「主の油注がれた者、わたしたちの命の息吹／その人が彼らの罠に捕えられた。異国民の中にあるときも、その人の陰で／生き抜こうと頼みにした、その人が。」とあります。エレミヤの時代のことになぞらえると、ユダ王国の最後の王ゼデキヤのことかもしれません。ゼデキヤは宗教改革で有名なヨシヤ王の兄弟で、新バビロニア軍に敗れたエホヤキン王のあとをついで王となりました。最初は新バビロニアに従順を装っていましたが、近隣諸国と一緒になって新バビロニアに反旗を翻し、最終的にネブカドレツァル軍に包囲され、ユダ王国の崩壊を招いた王です。彼は、子供たちを目の前で殺され、両眼をつぶされ、死の日まで鎖につながれていた、悲劇の王です。エレミヤの意には反していたのですが、イスラエルの民から見れば、一種の希望の星であったのだと思います。ダビデの家系の最後の王になります。ゼデキヤがバビロンに居る時もイスラエルの民はひそかに彼に期待を寄せていたが、ついに、希望はついえた、というのでしょう。

　イスラエルの民に臨んだ神の怒りは、容赦なく下され、かすかな希望があるように見えてもそれは一時的幻想であり、再び絶望の中におかれるのです。4章の最後は4:22「おとめシオンよ、悪事の赦される時が来る。再び捕囚となることはない。娘エドムよ、罪の罰せられる時が来る。お前の罪はことごとくあばかれる。」とあります。おとめシオンとはイスラエルの民のことです。これ以上、落ちるところはない、くらいにまで貶められて、あとは神の赦しが来るのを待つだけだ、というのです。希望というより、一種の開き直りのようにさえ感じます。娘エドムはイスラエルの宿敵です。イスラエルの運命を「ざまあみろ」くらいに思っている人々です。イスラエルの神は彼らの必ず復讐してくれるはずだ、というのです。イスラエルはそれをなす力はありません。主なる神しか頼ることはできないのです。

　このようにみてくると、哀歌はすさまじい詩です。大国のはざまで生き抜いてきたイスラエルの民は、どうにも逃げられない苦難の淵にありました。本当に絶望です。その中でもかすかな希望の光を見出そうとしてきました。しかし、常に裏切られます。それでも希望の光を見ようとして他の地に向かうのです。ユダヤ人の歴史をみると、この哀歌を地で行っているようなことがらが見えてきます。ユダヤ人迫害史の全体を概観してみましょう。

　まず捕囚の最初はBC721年、北王国がアッシリヤに滅ぼされた時です。そして本格的な捕囚は南王国が新バビロニアに滅ぼされた時です。BC597年、587年、582年の三次にわたっての捕囚でした。しかし、これらの捕囚はイスラエル社会の上流階級の人間の捕囚であり、一般の民はカナンの地に残されました。その後時代が飛び、主イエスの十字架と復活の事件のあとAD66年にガリラヤのユダヤ人が中心となり反ローマの反乱が起きます。これはローマの軍に敗北し、AD70年エルサレムは破壊されます。かなりの数の奴隷が発生しますが、まだユダヤ人の一部にとどまっていました。死海のほとりのマサダの砦にこもったユダヤ人が全員自害して果てる、という悲惨なことも起きました。第一次ユダヤ戦争と言います。その後、エジプトなどディアスポラのユダヤ人がローマに対し反乱をおこしたキトス戦争というのも起こります。そしてAD135年、ついにユダヤ人の反ローマ決起が始まりました。バル・コホバという人物が救い主として反乱を指導し、ユダヤ教の高名なラビもこの救い主を認めました。時のローマ皇帝はハドリアヌスでした。ユダヤ人を徹底的にやつけました。そして大量のユダヤ人を奴隷とするとともに、エルサレムにユダヤ人が住むこと、入ることを全面的に禁止しました。これにより、放浪の民ユダヤ人が決定的になりました。第二次ユダヤ戦争といいます。

　ユダヤ人はギリシャを初めヨーロッパに移住するとともに、メソポタミア等中近東にも多く移住しました。キリスト教はユダヤ人を「主イエスを殺した人々」ということで忌み嫌い、ユダヤ人の迫害を積極的に進めるようになっていきました。その後、イスラム教が誕生し急拡大しますが、ユダヤ人はイスラム社会で、厚遇される民族となっていきますが、キリスト教国はイスラムの手先として忌み嫌うようになります。そして、十字軍のさなか、AD1095年、ルーアンでのユダヤ人大量虐殺が発生し、ドイツにも伝播します。1144年にはイギリスでも血の中傷事件がおきます。ついに1182年、フランスがユダヤ人追放、1290年には英国もユダヤ人を追放しました。その間、ポグロムと称する、民衆がユダヤ人を集団で襲い、殺害するということが、あちこちで起きます。ついに1492年、コロンブスのアメリカ大陸発見の年ですが、スペインがユダヤ人を追放いたします。スペインのユダヤ人はイスラム支配の国の中で平和に暮らしていましたが、スペインというカソリックの雄である国がイスラム国家を滅ぼし、その後、ユダヤ人を追放したのです。

1569年にはローマ法王が教皇領からユダヤ人を追放しました。そして1648年ウクライナのユダヤ人がコサック、タタール人によって大量虐殺されるという事件がおりました。ポグロムが大規模になってきたのです。1654年にはユダヤ人難民がアメリカに移住するというのが始まっています。1789年のフランス革命によってユダヤ人も一人の人間としての権利が認められましたが、それは建前だけの話で、ヨーロッパのいたるところでユダヤ人排斥的な動きは止まるところ知らず、でした。1804年にはロシアで反ユダヤ人法規制が始まり、ユダヤ人はどんどん社会の隅に追いやられていく状況が続きました。

西ヨーロッパではユダヤ人に開放的な動きがでてきて1826年ついに英国に於いてユダヤ人に対する各種制限をすべて解除することになりました。これ以降、英国はヨーロッパユダヤ人の逃れの地のような国になります。1867年にはオーストリアでもユダヤ人解放がさせました。これと逆に、1881年から1882年にかけて、ポーランドやロシアではユダヤ人に対する大ポグロムが起きます。ユダヤ人の大量国外脱出が発生いたしました。西ヨーロッパでもユダヤ人差別は根強くフランスで、ドレフュース事件のようなことも起きました。アメリカでも魔女狩り的なユダヤ人迫害が起こったことが知られています。そして、パレスチナの地にユダヤ人国家を建設するというシオニズム運動が始まりました。これはユダヤ教の運動というより世俗主義の国家建設運動でしたが、イスラエルの建国後、これが宗教的色彩も帯びるようになっていきました。ユダヤ人迫害の極めつけは、ナチスによるホロコーストでした。

このユダヤ人迫害史の各場面のなかで19c末にウクライナで起きたポグロムと続く、ユダヤ人追放の出来事をテーマにしたのがミュージカルで有名な「屋根の上のヴァイオリン弾き」です。ウクライナの小さな村の牛乳屋のユダヤ人一家の話です。夫婦と5人の娘です。ユダヤ人の律法をちゃんと守りつつましく生活していました。夫婦はユダヤ人として娘に婿として来る若い男を探していました。しかし、上の三人の娘は、親の気持ちにもかかわらず、仕立て屋の男、革命を夢見る学生闘士、ロシア人の青年、と次々と親も元を離れていきます。そのうち、ポグロムのうわさが聞こえてきて、この村も落ち着かない状態になります。ついに、ユダヤ人追放命令が発生します。夫婦と三人の娘は別の地に逃げざるをえません。そこでラビは「新しい地で神の祝福を」と祈ります。村を立ち去る、一家を送るのが屋根の上でヴァイオリンを奏でる一人の男でした。いつも、今度はということで希望を持ちますが、また新しい地で失望し、追放され、更に彷徨う、というユダヤ人の中世以降の運命を表現しています。絶望の下で、あえて、あえて希望を持つが、結局また絶望に落とされる結末です。

実に、ユダヤ人迫害史は哀歌を地で行く歴史でした。このような歴史を繰り返していくと通常は、民族は消えてなくなります。しかし、彼らは消えませんでした。今も強力な集団を保っています。ユダヤ教という宗教がこれを維持しています。ユダヤ教は当初のイスラエル信仰から大きく変容し、宗教による民族形成という特殊な集団を作りました。そして、パレスチナの地に独自な国家を形成するにまで至ります。ユダヤ人は、極めて問題の多い宗教集団ですが主なる神の選びの民の一部であることに変わりはないはずです。毎年、繰り返されるユダヤ暦5月9日の哀歌朗読はその苦難の歴史を懐古する機会です。新しきイスラエルを自称する我々キリスト者も本来のイスラエル信仰、主イエスの言動に従おうとするとこの哀歌に示された苦難に直面するのかもしれません。